

2022 年度龍谷大学文学部考古学実習報告書



2023

龍谷大学文学部歴史学科文化遺産学専攻

例 言

- 1 本冊は、龍谷大学文学部歴史学科文化遺産学専攻が 2022 年度に実施した考古学実習報告書である。
- 2 本冊は、前年度まで『考古学実習・文化財実習報告書』として刊行してきたものを考古学実習のみの編集とし、デジタル化したものである。
- 3 考古学実習は、國下多美樹・木許 守（文化遺産学専攻教授）、伊野近富、谷崎仁美（同非常勤講師）が担当した。
- 4 本文の執筆は、各実習担当者と受講者が行い、文責を文末に示した。
- 5 本書の編集は、担当教員の協力のもと、國下多美樹が担当した。
- 6 なお、夏季考古学実習として実施した周山 2 号墳調査では、杉山洋先生によるドローン写真撮影協力があった。
- 7 表表紙の写真は、周山古墳群夏季発掘調査時のミーティング風景である。

目 次

- 1 2022 年度考古学実習の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(2)
- 2 夏期発掘実習・周山 2 号墳発掘調査参加記・・・・・・・・・・・・・・・・(4)

I 2022 年度考古学実習の概要

1 目的と概要

2022 年度の考古学実習は、考古学的調査・研究に不可欠な基礎的技術である、遺跡の調査法、遺構の検出と記録、遺物の観察と記録、報告書作成までの一連の過程、史跡の保存・活用を実践的に学び、考古学的なモノの見方、記録法を身につけることをねらいとして実施した。特に、フィールドワークを多く行った。

4 人の教員によるチェーンレクチュアで、先史時代～近世までの遺構・遺物について基本的知識と方法を実践的に学修した。夏期は、京都市右京区京北町で古墳の発掘調査を実施した。

実習は、國下多美樹・木許 守（文化遺産学教授）、谷崎仁美、伊野近富（同非常勤講師）が担当した。また、ティーチングアシスタントとして前田詞子（修士課程 2 回）、吉田野々（同 1 回）の協力を得た。実習参加者は、下記の通りである。

赤坂咲衣、池浦里咲、池田匠弥、石橋初音、伊藤鴻司、稲垣杏奈、植木悠矢、浦 天音、親川茜音、片岡亜希、金井セピアアイシャエルフィアン、川崎凜、川村心之輔、木井荘太、岸本悠馬、北岡正充、北澤蒼梧、鎌田健太郎、小谷彩翔、小林永都、笹山和寛、関元隆明、高橋一馬、竹中彬子、立花一佳、伊丹稀星、小山田博一、志垣菜由、浅沼興希

谷田朱里、出口新、中尾有希、中村幸世、永野莞作、西村 雪、西本将太郎、萩田雅己、蓮井怜香、平田凌大、舟田涼乃、堀川楓華、政川綾音、増田寛之、松井 調、松尾野々花、南 陸斗、宮崎なな、村崎結愛、森 えりか、藪中美月、山口千穂、吉田将司、和田茉薫、瀧 欣怡、永田裕希

以下、各実習の概要について述べる。

〔1〕先史時代調査法

考古資料の形、器表面に残る痕跡は何を意味するのかについて、深草遺跡の弥生土器・石器、陶器産須恵器の実物による学修を行った。その後、スケッチ、遺物実測法について実践的な講義を行った。

○弥生土器の見方と解釈

深草遺跡の中期弥生土器を使って、種類、形、技法を学んだ。実物を観察しながらスケッチする、文様の拓本を採る実習を行った。また信楽焼の陶土を利用して回転台上で土器表面に文様を施すことで、文様が痕跡として残されたのかを考えた。（國下）

○古墳時代遺物の見方と解釈

須恵器の実測と金銅製魚佩（藤ノ木古墳出土品をモデルとした復原品）の観察を行った。須恵器の実測は、陶器産須恵器の実物の杯身・杯蓋の実測図を作成した。この図面と編年図（田辺編年・中村編年）を対照して須恵器の型式を比定し、実際に観察・実測した遺物の編年的位置を確認した。金銅製魚佩の観察は、古墳時代彫金技法の種類を学修したうえで、復原品を観察し、写真や図面に表現されている技法の実際を確認した。（木許）

○飛鳥・奈良時代遺物の見方と解釈

飛鳥・奈良時代須恵器を利用し、古墳時代から飛鳥時代の食器文化の変化を学んだ。

〔2〕発掘調査実習

発掘調査の目的、方法についての講義を経たのち、調査参加への心構えについて講義し、調査開始までに測量実習を行った。（國下）

〔3〕古代調査法

前期は、瓦の観察法やスケッチ、拓本の方法を学



▲ 夏季発掘調査実習（周山 2 号墳）



▲ 遺物写真撮影実習（國下担当）

んだ。観察法は、パワーポイントの写真や本学所蔵の平川廃寺（京都府城陽市）出土瓦を用いた。感染症対策として一定の距離を保ちながら、実際に瓦に触れて細部を観察し、文様や製作技法について意見を出し合った。また、帝塚山大学附属博物館（奈良県生駒市）の展示を見学させていただき、授業で修得した観察視点に注意しながら、遺物スケッチを行った。拓本は、本学東覚建替え工事に伴う発掘調査で出土した近世瓦を用いた。

後期は、デジタル図化の方法を学んだ。前期に各自作成した拓本を Adobe Photoshop を用いて加工したり、遺構平・断面図、遺物実測図を Adobe illustrator を用いてデジタルトレースしたりして技術の習得に努めた。（谷崎）

〔4〕平安時代以降調査法（土師器の実習ほか）

京都府内を中心に発掘調査で確認された遺構や遺物についてスライドや図面で説明した。まず、土師器皿は実物を観察することによって、大きさや重さを体験し、表面のナデやケズリといった跡を確かめ、指紋が残存していることを学んだ。

白磁や青磁について七八百年前に中国を出航した船に積み込まれ、北部九州から京都へ運ばれたことや、形によって時代が判定できることを学ぶとともに 12 世紀後半の遺跡から出土量が多くなることから、平氏による日宋貿易の興隆を示していることを学んだ。土器・陶器・磁器など焼き方の違いによって質感が違ふこと、軽く表面をたたくことで音が違ふことを体験して学んだ。

同時期に中国の宋銭が多量に出土したことも同じく日宋貿易に関係したこと、また、13 世紀後半からは銭で税を納めることが一般化したことも学んだ。実際に実物を観察し、大きさを確認した。さらに、文字を確認する作業を通じて、いつの時代に鋳造されたのかわかることも学んだ。

実地としては 1588 年に行われた後陽成天皇による聚楽第行幸コースをたどった。京都御所から中立売通りを通り、加賀前田家や織田家の家紋瓦が出土した地点を確認した。聚楽第東堀地点では、地面が聚楽第内部に向けて少し上がっており、堀が存在していたことを窺うことができることを学んだ。

以上のように、実習では遺物から多くの情報が得られること、また京都に残る遺跡を辿ることで、いくつかの情報が現地に残っており、発掘調査成果とも合わせると、より深く実習できることを学んだ。

（伊野）

〔5〕遺構・遺物等実測図・デジタル図化の作成実習

○遺構実測の実習

遺構実測は、大宮学舎北麓や南麓などの外構に明治期の煉瓦敷が遺存していることを受講生で確認したうえで、本館北側の渡り廊下部分に現在復元的に設置されている煉瓦敷を遺構として実測した。これは、渡り廊下に屋根が架されていることで雨や直射日光の影響を受けにくいことから、天候や熱射病等に左右されないで実習をスムーズに行うための措置である。受講生を 3～4 名で 1 班として編成し、各班で 1/20 の平面図を作成した。

○デジタル図化の実習（遺跡分布図の作成）

瓦の拓本や実測図のデジタル画像処理の実習に引き続き、デジタル図化の基礎として、スキャナーや解像度など画像データを扱う際に必要な基礎知識を学修した。そして、地図データをソフト（Adobe illustrator）上に配置し、必要な遺跡の範囲や位置をトレースしていくことで、遺跡分布図の作成方法を学んだ。この実習を通じて、必ずしも遺跡分布図でなくても、卒業論文などに使う挿図作成の基礎技術を習得できるように努めた。（木許）



▲ 平安時代以降調査法の講義（伊野担当）



▲ 実地踏査・聚楽第行幸コース（伊野担当）

2. 夏期発掘実習・周山2号墳発掘調査参加記

考古学実習での学び

石橋初音 (L210763)

3日間夏期発掘調査実習に参加して、考古学の発掘といえどもひとえに掘るだけではなくその他にも様々な作業があるということを知った。私自身考古学の経験は勿論のこと知識もなかったため、様々な機械や道具を用いた測量などはとても新鮮で驚きがあった。初日は平板測量をして方眼用紙にアリダードを使ってトレンチの測量をしたが、実際に自分の目で見て記録していくため正確さが求められると感じた。また、レベル測量でも初めての体験であり測量に時間が掛かったため正確に効率よく測定していくことが非常に難しいと感じた。3日目は古墳全体の測量と10年前の等高線図と比較して等高線を引く作業をして、大部分は過去の測量図とほぼ一致する等高線が引けていたが、一部ずれたところがありその部分に木が生えていたことから10年の間で地形が変化した可能性があると考えられた。このことから自然を相手にしているということが記録に何かしらの変化を起こしたり影響を及ぼすことも考慮しなければならないということが分かった。

2日目は実際に2-1 トレンチ西の発掘をして、この日は掘削と写真撮影を行った。作業を通して5mm程度の小石や小さな石が10個以上出てきた他、湿り気のある土の塊が出てくるなど石の出土状況やどのくらいの大きさの石が出たのか、土はどんな色でどんな状態であるのかや土の表面の凹凸具合などしっかりと自分の目で見て注意深く観察することが発掘調査において重要であり土や地層の状態などから古墳の端が推測されており観察に基づいて考察し何かを発見していくことが大切であることを学んだ。

今回の考古学実習を通して、発掘調査は調査期間が決まっており時間に限りがあるため正確かつ効率よく作業を進めていかなければならないということが分かった。更に発掘をしていく上で土の状態やどんなものが出たのかを注意深く観察し、その状況から推測される気づきや発見をしていくことが大切であることを知り学びの多い3日間であったと感じた。

考古学実習夏季発掘調査感想文

伊藤鴻司 (L210764)

今回初めての発掘実習に参加させて頂き、とても貴重な体験をさせて頂きました。この学科の特徴的な部分である実習をようやく体感することができ、とても満足いくものになりました。初日は草刈りから始まり、古墳のリアルな現在の姿を垣間見ることが出来たと思います。次に表土の掘り下げに入りましたが、とても骨の折れる作業でした。根っこが絡み合っていて手鍬が入らなかったり、ムカデや蜂に脅かされながら何とか次の粘土層にたどり着くことができました。粘土層にたどり着いてからはすぐに人頭大の石を古墳下部から発見することができ、それまで成果という成果は挙げられていなかったのもあいまって、とても興奮しました。当初は葺石が転がり落ちてきたのではないかと想定されましたが、上部の掘り下げが進むにつれて葺石の存在が確認されなかったことにより、最終的に明治期の村道ではないかと推定されました。実際にその



▲ さあ発掘開始だ（周山2号墳）

後道を形作っていたかのように連続して同じような大きさの石が出てきたため、先生方の推定の精度の高さを目の当たりにすることができました。

最終日はトレンチの横壁面部などを綺麗に整える作業が主でした。初日に苦しめられた根っこに再度苦しめられ、不慣れな作業だったのもあり正直1番苦痛ではありましたが、期間が終わる前にある程度整えることはできたので悪くなかったのではないかと感じています。この3日間では、これまで教室で学んで来たこととは種類の異なる、考古学の面白さや奥深さ、いまだに発見されていないことがどんどんわかっていく楽しさを体で実感することができました。このような機会があれば積極的に参加していき、見識を深めさらなる技術の向上を目指したいと考えています。

調査に必要なこと

稲垣杏奈 (L210765)

今回の発掘調査で1番感じたことは、土を掘る作業がかなり大変だったということです。調査全体の中で、私は草刈りの終わりかけと掘り始めあたりから参加をしたのですが、まず掘るにはかなりの量の草を刈らなければ土の面が出てこないで大変だと思いました。中には背が高く根が太いものも多くあり、かなり力がある場面もありました。もちろん、これから掘る場所を考えながら、ここをこのあたりまでというように見据えながら刈っていくのは、単純作業ではないので頭も体も働かせなければならぬと感じました。それからやっと土の面が出てきて、掘る範囲を決めて、いよいよ掘り始めたときも、すんなり掘り進められるものではないことに気づきました。もうあとはひたすら掘り続けるものだという考えは甘かったと感じました。いざ掘ってみると、木の根があまりにも多く常に根を切る作業が要りました。掘り進めようとしても、根が引っかかってなかなか土が減っていかなくて大変でした。ですが、掘っているとだんだん土の変化が見られて、硬さや色の違いがはっきりと分かるのが面白く感じました。実際に調査の現場で、自分の目で見て自分の手で触ってみることで、違いがよく観察できたと思います。また、土やそこに埋まっている石の状態によって、年代やどのような土地だったのかということが分かるのには驚きました。その土地がこれまでどのような環境で、人と関わってきたのかということが考えられることが面白いなと思いました。土から歴史を感じる事が出来ました。

もちろん調査をする場所によって環境が違ったり、

調査をするにあたって当たり前のことだったりするのかも知れませんが、実際に参加してみてかなりの体力を要したので、ただ知識を持っているだけでは意味がないと感じました。経験と同じ作業を根気よく続ける力が必要だと、今回参加したことによって気づきました。とても良い経験になったと思います。

発掘現場での記録方法

浦 天音 (L210767)

私が今回の発掘調査で行った作業で印象に残っているのは平板測量と地層の記録である。まず、平板測量は起点を定め、そこから水平に台を組み立て、その台の上でトレンチとの距離を測り、作図をしていくという作業であったが、言葉で説明をされると簡単そうに聞こえるが、実際にやってみると、かなり難しかった。特に、台を水平にすることに加えて起点をぴったりそろえることが特に難しいと感じた。そして、その後に正確な図面をとる必要があるが、この作業も大変だった。正確さも大切だが、起点からの距離を測るときにゆっくりしていると段々とずれていくため、ずれる前に計測しなければならないことも中々困難だった。今はもう平板測量はあまり行われておらず、写真を撮るのが主流であるそうなので、貴重な体験をできたと思う。

二つ目は地層の作図が印象に残った。私が参加したのは最終日だったため、完全に掘り終わっているトレンチの地層の等高を記録し、地層に埋まっている石なども記録していく作業だった。縮図を書くのは意外と難しく、特に小さい石などを描くことが難しかった。実際はある程度の大きさがあるのに対し、図に起こすと思っているよりもかなり小さくなったため、何度か計測しなおしたりした。

これらの体験を通して私が一番大変だと感じたのは測量や作図をする前に行う水糸やメジャーの設置だと思った。この準備がしっかりとできていないと作図をした際かなりずれてしまうため、かなりしっかりとやっておいた方がよいと体感した。また、平板測量は今回の発掘調査で初めて知った。写真を撮ってデジタルで図面に起こすことは聞いたことがあったが、アナログでもできるのだと知った。ただ、かなり測量する人の技能が必要そうな作業だと感じた。今回私が参加できたのは最後だけであったため、撤収作業や記録の取り方などをよく教えてもらうことができた。どれも初めて経験することばかりで貴重な体験であったと思う。

夏季発掘調査実習で見た地域の方との交流

金井アイシャ (L210770)

私は今回の夏季発掘調査実習で8月25日、26日の2日間に渡り参加させていただいた。初の発掘調査参加だったため、すべての作業が新鮮だったのは勿論だが、その中でも印象に残っている2点を述べる。それは調査を進める中で得られた発見をまとめ上げるミーティングと、地域の方々を招いた説明会での交流である。

初めに述べたミーティングは、調査が西トレンチと東トレンチの2パートに分かれ作業するためお互いの発見や進捗を確認するべくその日の終わりに行われるものだ。個人で思うままに行動するのではなく、全体の進捗や想定をすり合わせる必要がある発掘調査は団体行動であり、集団で一丸となって動く必要のあるもののだと再確認した。

次に述べた説明会とは、8月26日に行われた周山2号墳地元説明会である。当説明会には地元の方をはじめ敷地内の小中学校の教職員の方など、十数人が参加された。参加者の方々は、京北に残る古墳群やその発掘にあたる活動の様子に非常に興味を持っていらっしゃる様子だったのが印象的だった。

交流も多く見られたが、中でも発掘にあたられている國下先生は参加者の方々と親しげに話されている様子だった。ただ発掘対象の遺物に向き合うだけでなく、調査地の地元の方々とも交流を深めることは発掘への理解を持っていただけるし、円滑に調査を進める上でも非常に重要なことだろう。

私は今まで発掘調査を個人個人が独立して動き、自分のペースで進めていくものだと考えていたが、それは大きな間違いだったと今回の調査参加を通して気づくことが出来た。

参加する全ての人と得た発見・情報を共有することで、より効率的に動けるだろうし、他の人の考えのお陰で新たな視点で対象物を観察することができるはずだ。

また、調査地の地元の方が参加される説明会は交流の場となり、郷土の文化財を身近に思っただけの機会にもなる。今回の夏季発掘調査実習は初めての参加だったが、以上のことに気づかせてくれる貴重な経験となった。

東トレンチ発掘調査

川崎凜 (L210771)

私は、今年の夏に夏季発掘調査実習に参加した。期間は、8月の20日から22日の計3日の調査であった。場所は京都市右京区京北下町に所在する周山2号墳という遺跡で、私は初めての発掘調査ということでとても楽しみにしていた。

初日である20日では、前任のAグループが天候悪化のために最後まで作業が進まなかった遺跡周りの雑草の除草作業から開始した。朝はその作業で終わった。昼の部では発掘調査に必要な道具の説明から始まった。教えてもらったのはレベルという高さを測量する望遠鏡のような装置でいろいろな注意点を話してくれた。まず初めに、土台となる三脚はレベルを安定させるためにあしとなる部分を正三角形のように配置するということを学んだ。次に、器具を触る時に手に付けているもの例えば、軍手や指輪などといったものを外して使用することを学んだ。これについては考古学を学んでいくうえで発掘調査は必須になってくる。そしてこの大事なことは忘れてはいけないものになるのでしっかりメモして覚えておこうと思った。また、3つの水平ねじや左右調節ねじでのピントの合わせ方、水球の動き方などを教わった。説明も終えた後いよいよ人生初となる発掘調査が開始した。その時に発掘を行う場所をトレンチといいトレンチは一か所ばかりを掘り進めていくのではなくなるべく同じ高さにそろえなければならないと教わった。

2日目の21日は、前日までは西側のトレンチで作業を行っていたのだがこの日から、遺跡の東側の部分も発掘するという事になった。私は、その東側のトレンチを任されることになった。結果から言うと、東トレンチからは明治時代の瓦と年代不明の石の集合が出土した。また、土の様子なのだが1層目の腐葉土から黄色で固い粘土の層が出現した。先生が言うには、地山なのかそれとも盛土なのかはわからないという。また、石の集合については古墳の頂上にあった岩が転げ落ちてきてこうなったのではないかと推測している。

3日目の22日は前日と同じで、東トレンチの発掘を行った。これといった出土物はなかったが石の集合は50cm東に移動しても見つけることができた。見解は葺石の再利用とされている。

3日間の発掘調査であったが、身につくことばかりでとても楽しかった。

長期参加

岸本悠馬 (L210774)

私は今回の調査実習で現場には6日間参加した。先生方や院生の方などを除けば、おそらく参加者のなかで一番多く現場に足を運んでいた。入学以前の受験する大学を決める際に、「龍谷大学の文化遺産学専攻では発掘調査の実習がある」ということに魅力を感じていたから、今回の実習は非常に楽しみなものであった。また、「三日間ではわかることが少ない」という先生の発言を真に受け、できるだけ多くのことを学びたいと思い、七日間参加することにした。

参加初日は現場作業開始から4日目の日であった。行ってみるとトレンチが二つあり、それぞれ長さや様子が違っていた。西側のトレンチが少し長い、まだ深く掘れていないように見えた。作業するのは、この2-1トレンチ西側が多かった。実習を通して一番多く行っていた作業は掘削であったと思うが、しゃがみ込んで堅い土を削り続けるのは骨が折れた。特に雨が降った日は地面がぬかるんで滑りやすく、体勢を維持して力を入れるのが大変だった。また、靴の裏に山の黒い表土が付くやすく、作業しているとトレンチ内が汚れてしまい、その汚れを取るために何度も同じ場所を削らなければならなかったのは辛かった。

掘削の作業は、作業そのものも大変だったが、西側トレンチは特に土の状態から古墳の様相がわかりにくく、遺物や葺石が出なかったことも、なかなか気持ちが明るくならない原因であったと思う。土の様子は説明されて、なんとなく違いがわかることがあっても、植物の影響で土の色が変わることもあるらしく、遺物などが出てこない年代を断定するのは難しいと感じた。終盤にさらに掘り下げ、葺石かは分からなくとも石が出てきた時には、ぱっと見でも様子が変わっていることがわかり、少なからず高揚感があった。

現場での作業は掘削のほか、トータルステーションや平板での測量、日程が短縮されたことからトレンチの断面図の作図も経験することが出来た。試行回数が少ないことから、道具の使い方も作図の仕方もうまくいかないことがあり、反省点は多くあったと感じる。目立った遺物がなかったのは少々味気ないものであったが、調査は毎回すごい発見があるわけではないであろうことや当初の調査目標を考えれば、こんなものだろうという気もした。現場で様々な作業をしながらトレンチの変わり様を見られたのは良い経験になったと思う。

周山2号墳の草刈り

北岡正充 (L210775)

私は夏季発掘実習の全体を通して初めの三日間である8月17日から19日に参加するつもりだったが、予期せぬ夏の大雨で17日と18日は中止となってしまった。この二日間は雷が鳴るほどの大雨だったことを覚えている。よって私がこの発掘実習に参加できたのは実質19日の一日間のみだった。

当日朝早い8:30に京都駅に集合。天気は前日までの大雨とは打って変わって、気持ちの良い快晴だった。そのまま京北、周山行きのバスに乗り、およそ1時間半バスに揺られて、発掘調査現場である周山古墳群2号墳に到着した。到着後、現地の方々と挨拶をした。10:00頃、2号墳の近くに発掘調査の拠点となるテントを設置。設置後すぐに2号墳の草刈りが始まった。まず古墳の周りに道をつくるように草刈りをした。生えている草の大体はクマザサで、自分が思ったよりもサクサクと刈ることができた。古墳のあるところの上空は木で覆われていたから、快晴で暑いはずの気温も、直射日光が入らなかったおかげで暑さをそんなに感じなかった。むしろ木々の間からすり抜ける風が軽く爽やかで、気持ち良ささを感じていた。

草刈りを一旦中断し昼休みに入った。これまで大学の教室内では話したこともなかった人とも話せた。おそらくこの実習を通さなければ、関わることはなかったのかもしれない。少しの間ではあったが、いい機会となった。お昼ご飯も食べ終わって、のんびり過ごしたあと午後からの草刈りが再開した。

午前中に草刈りしたところを見てみると、きちんと2号墳の周りに道ができていた。そして午後からは2号墳の上を中心に草刈りをしていった。クマザサを刈



▲ 平板測量もやりました (周山2号墳)

り続けるのは午前中と変わらなかったが、午後から2号墳の全貌が少しずつ見えていったことに楽しみを感じた。途中、倒木を横に除けながら、2号墳の全体が見えるほどになった。気が付くと15:30になっていた。2号墳の写真撮影を終え、発掘実習は終了した。

自分が参加した19日は草刈りのみで終了してしまったため、地質の変化や出土品などは見当たらなかったが、発掘調査を始めるにあたって何よりも大事な下地づくりであろう、テント設置と草刈りに参加できて良かった。とてもいい経験になった。

夏季発掘調査実習参加記

小谷彩翔 (L210778)

今回周山2号墳発掘調査の夏季発掘調査実習に参加して遺跡を発掘・調査するという初めての貴重な体験をさせていただきました。

この実習に参加して感じたことは、記録の重要性です。私は、3日間の実習の中で2日間平板での実測の方に参加していました。1日目は、平板やそれに関する道具の説明を受け、過去の資料をもとにトレンチの位置を記録する作業を行いました。少しのズレが結果として大きなズレにつながり、再び測量することとなるなど実測においていかに丁寧に作業を進めないといけないということを実感しました。

また、平板では現地の様子を縮尺を用いて記録していきます。しかし、この作業では実際に測った数値の誤差などが平板では顕著に表れることを実感しました。実測は複数でチームとなって行うため、声掛けや細かい気配りなどでより正確な記録を残せるのではないかと思います。

3日目の実測では、レベルを使用して前回の実測で記録された等高線の補足を行いました。ここで一番難しいと感じたのは、レベル高等の計算です。私自身は少し手伝っただけではありますが、さまざま数値を足し引きすることで、測るべき値を導き出すのは3日間の中で一番難しいと感じました。

また、3日目に現地説明会のビラ配りにも参加させていただきました。コロナ感染対策のため地域住民の方に直接会って話すという機会はあまりありませんでした。しかし、庭で作業されていた方の中では数名関心をもって聞いてくださる方もおり、遺跡の調査は研究のためだけではなくその地域のためにもなるのだと実感しました。

そして、街の中を歩いていく中で周山にある川や施設など地域のことも知ることが出来たため楽しいと感じ

ました。

今回、私が参加した3日間では遺物を発見するという体験はできませんでしたが、調査が進んでいくと共に、古墳についてわかることが増えていくという達成感を感じることが出来たと思います。初めての考古学の調査で有意義な時間であったと感じています。

夏季発掘調査に参加して

小林永都 (L210779)

まず初日に古墳を訪れた際に感じたことは思っていた以上の気温がある中で作業になると感じた。初日は主に東トレンチの幅を広げる作業を中心として行った。一番上にかかっていた腐葉土層を掘り下げる際の土は非常に軽く硬さを持っていない土だったため土自体の掘り下げは非常に早く終わることができた。しかしこの掘り下げで何より大変だったことは古墳に生えた植物の根を撤去する作業である。ある程度太さがあるのであれば簡単に処理ができるものの非常に細かい根は発掘後に地層を確認しなければならないということで非常に丁寧に切る必要があった。特に地層を確認する際に重要となる側面ではそこに沿って丁寧に切ることが求められた。細かい根でも適当に引っ張って抜こうとしては周りの土も一緒に崩れてしまう可能性があるためしっかりとさみで切らなければならず非常に大変であった。午後になると腐葉土層から本格的な土層が出てきて道具のガリを使ってもなかなか掘れないほどの硬さを持った土が出てきた。初日の評価ではこの硬い層は古墳がつくられた当時の盛り土もしくは元の山の層ではないかという考えがでた。

2日目は電子平板を用いて古墳の測量を行った。なかなかこのような機器を扱う機会はないので非常に貴



▲ 一番大変だった古墳の草刈り（周山2号墳）

重な経験をさせてもらった。午後からはトレンチの撮影を行うために今まで掘った場所をきれいに整備する作業を行った。木の根の撤去や周りの清掃などを行った。

3日目は東トレンチで古墳の端を見つけるためにより深く掘る作業を行った。今回はガリを使って地道に掘るのではなくスコップで深く掘り、より分かりやすく地層を見ることとした。今回の作業が3日間を通じて一番疲れる作業であった。ガリが縦に入るのを目安に掘ったため非常に時間がかかる作業となったものの最後のミーティングで確認してみるとまだ精査は必要であるもののある程度どこに古墳の端があるのか見当がつくほどまでになった。

今回の作業は非常に大変だったものの大きく掘ったり細かく確認しながら掘ったりなど一番いい作業をやらせていただいた。初日参加した際は遺物が出る可能性は低いと知り残念に感じたものの掘って地層を確認してみると明らかに土の色が変わっていて教授の説明を聞き納得できるものが多く非常に面白かった。

発掘調査に参加した三日間で学んだこと

笹山和寛 (L210780)

考古学実習の授業の一環で三日間発掘調査に参加した。初日ということもあり、これまでに参加していた同期や院生、先輩方、先生方に道具の使い方や現在の状況がどうなっているのかを説明してもらいながら作業に取り組んだ。成果としては、東トレンチで大きめの石が出土し、この石は先生方によると石畳の道ではないかという推測が出た。上部の粘土層が盛り土と考え、石の下にも粘土層が出れば墳丘の葺石である可能性もあるという意見も上がっていた。西トレンチの方では、中央には急に下がった層が見られた。古墳を作る際に整地されたのではないかと考えられている。このように、調査をひと段落したらミーティングを行うことによってその現場どうしの進捗状況を理解することができるが、経験のない私にはとても難しいものだった。どうして、道があったと推測されるのか、盛り土がここまで来ているのかなどやはり経験しなければ、理解しえないものがあると痛感した。

発掘調査では地面を掘り下げていくので、土壌から得られる情報がとても多いと感じた。土は色で見分けることができるが、土壌に含まれる枯れ葉や木の根などの有機物の影響により変色したりするので非常に騙されやすいことが分かった。それに比べて土の硬さというものは重要であることが分かった。古墳の土であ

れば、人工的に固められているのでそれなりの硬さが出る。それ以外の外の土は自重で固まるので軟性である。このような違いも理解することができた。

参加した最終日には現地説明会があり、地元の方々を誘導する仕事を任され、しっかりと取り組めたと思う。説明会の形式を実際に見ることができたのはいい経験だった。その後も調査は続き、図面作成に取り組むにあたり、水糸を張るときにレベルという機材を用いて高さを揃える作業を行った。ミリ単位になるのですごく難しかった。機材を使用する計測には取り組むことはできなかったが、大いに楽しむことができた。

この経験は今後考古学の道に進むかどうかはまだわからないが、複数人と協力して何かを成し遂げていくことは今後の人生には付きまとうことだと感じているし、慣れているに越したことはないと思う。この経験を活かして今後の生活、自分の好きな分野を研究していきたい。

平板測量について

竹中彬子 (L210783)

8月23日と26日の夏季発掘調査実習に参加して印象に残ったことは平板測量である。23日と26日のどちらも平板測量担当の班であったので平板測量の方法をよく学ぶことができた。

8月23日の調査実習では古墳の東側の等高線の測量を行なった。平板測量をする際に最初に平板の設置方法を学んだ。基点となる杭の真上に平板を置くためにぶらりと呼ばれる糸の先に円錐状の重しのような物を吊るした道具を使うことがわかった。杭の真上に平板を設置した後RP50を基準としてレベル高をとった。レベルの設置方法やレベル高のとり方、なぜレベル高が平板測量に必要なのかを学ぶことができた。レベルを設置する際に水平にすることが難しかった。レベルの下についている3つのネジでの調整が複雑に感じた。平板とレベルを設置し終わるとスタッフと呼ばれる長さの書かれた棒とメジャーを使い等高線の測量を行なった。私は計測する地点にスタッフを立てる役割と平板とスタッフの距離をメジャーで測る役割を担った。スタッフを立てる際の足場が不安定であったこともありスタッフを垂直に立てておくことに苦労した。

8月26日の調査実習ではRP50を基点として西トレンチまでの距離の測量を行なった。23日に一度平板とレベルの設置方法を学んでいたので平板やレベルを設置する際に設置方法の復習ができたことが個人的には良かった。23日には古墳東側の等高線の測量を

行なったが26日には西トレンチの測量を行なったので、平板測量の要領は同じであるが等高線の測量とは違った測量を行うことができたことも良い経験になったと思う。

26日午後の測量時に木許先生が「平板測量は少なくなっている」という話をされていたことが調査実習を通して特に印象に残った。東トレンチでは写真測量が行われていたので平板測量にかかる手間と写真測量にかかる手間を比べることができた。写真測量は四隅に四角形の白色と黒色の模様が入った板を置いて写真を撮るだけなので平板測量よりも容易であることが見てとれた。平板測量は平板やレベルの設置、スタッフやメジャー、スタッフを覗く穴のある定規などの道具を使い測量するので写真測量より手間がかかる。しかし、私は今回の調査実習を通して平板測量は手間もかかるが楽しいものであることを学んだ。また平板測量をしてみたいと思った。

鉄器出土

立花一佳 (L210784)

雨の影響で一日参加日が減ってしまいましたが、初日と二日目に大変貴重な体験をさせていただきました。初日の作業のメインは草刈でした。しかし草刈だけでなく、テントの張り方も教わりました。あまりアウトドアな性格ではないので無知でしたが、新しい知識を学びました。

初日は古墳の形がはっきりとわからないほど雑草が生い茂っていましたが、作業を進めていくなかで古墳の形があらわになってきたのを見るとうれしく感じました。草刈りだけでは正直得られるものが少ないと思っていましたが、以外にも高低差のある場所やあまりない場所、盛り上がっている場所などが感覚としてつかめてくるのだと分かりました。

二日目は古墳全体の大きさを測り、古墳の西部分あたりの発掘を行いました。大きさを図るのも範囲を決めて水系を張るのも人の協力が不可欠な作業なので、改めて協力が大事であると学びました。発掘は午後に行いました。私が掘り続けていた場所は石ばかりで、どれも遺物ではありませんでした。

発掘調査はどこも同じ深さにしなくてはならないところや、遺物かと思ったただの昆虫だったなど簡単ではない点が多くあると感じました。発掘調査の終盤で鉄器が見つかりました。先ほどまでしばらくただの石しか出てこなかったために油断して安易に拾い上げてしまったので何事も気を抜いてはいけなかったと反省しています。鉄器は意外にもそこまで深くは掘り下げていない雑草の根元にあったので、鉄器だと分かっ

たときは驚きでした。

等高線を調べる

谷田朱里 (L210785)

発掘調査実習に3日間参加したなかで最も印象的で記憶に残ったのは、等高線調査である。私が抱いていた発掘調査のイメージは、土を掘り、埋蔵物を見つけたり地層を調べたりするというものだった。そのため標高を調べて等高線を方眼紙に書き込む作業も発掘調査に含まれるとは思わなかった。調査参加初日に等高線調査の担当に割り当てられたときは非常に驚いた。等高線調査において使用する道具や作業工程が多いことにも驚いた。私はアナログな方法での調査に参加した。その時の班のメンバーは5人いたのだが、作業に5人も必要だとは思わなかったため、交代で作業することになるかと思っていた。しかし調査方法や作業内容の詳しい説明を受けると5人は適切な人数であると分かった。実際に5人全員に異なる作業が割り当てられた。

私が最初に担当したのは方眼紙に点を打つ作業だった。平板の上に敷いた方眼紙上で、定規を用いて基準地からスタッフまでの角度を合わせて、基準地とスタッフ間の距離をメジャー担当の人から聞き、50分の1の縮尺に合わせて方眼紙に点を打つ、という流れだった。1時間ほど点を打つ作業を行った後、担当作業を入れ替えることになった。後半はレベルを用いてスタッフの位置と高さを決める作業を担当した。杉の木に邪魔をされて、スタッフの位置が思うように決められなかったが、その悪戦苦闘も良い経験になった。またどの作業においても初めて触る道具があり、貴重な経験になったと感じている。

今回は古墳全体の等高線を調べたわけではなく、10年前の調査時に作られた図面の足りていないところを補足する形で、古墳の東側のみ等高線を調べた。私が担当した日に一通り調査は完了したのだが、今回作成した図面と10年前に作成された図面を基準地で合わせると一致しないことが判明した。何が原因で図面にズレが生じたのか分からず、メンバーや先生と話し合いを行った。結果、レベルの機械高の値を見直すことになったがその判断が正しいのかはこの時点では分からなかった。この試行錯誤しながら原因を探るわくわく感が、私には非常に面白く感じた。

新しい知識や実地でしか感じられないことなど、多くのことを吸収できた発掘調査実習はとても良い体験になった。

発掘調査実習を終えて

出口 新 (L210786)

今夏の周山古墳の発掘調査実習は、自分にとってとても実になるものとなった。

自分は今回の調査実習で、掘り下げから、平面図の作図、片づけまでを行ったが、そのほかにもさまざまな経験をすることができた。

トレンチの掘り下げは、大変なものであった。最初は、どこからどのように掘ればよいか、また、どこから層が変わるのかも見てわからなかったし、石が出た時もどのように対処すれば良いか全くわからず、無心に掘り続けていたが、日数が経つにつれ、こういった目的で、また、どの層からどの層への変化をわかるようにするかなど、その掘り下げにどんな目的があるかを理解しながら、掘り下げをおこなっていきけるようになった。

また、2日目の実習で、地元説明会の手伝いも経験することができた。こうやって、その土地にある遺産、遺構について、自分たちがどのように調べ、どのようなことがわかったのかを、地元の人々に報告することは、その地域の人々とのつながりを深め、自分達の活動を理解してもらうためにもとても重要なことだと感じた。自分も調査をする仕事についた時には、こういった説明会というのを大事にできたら良いなと感じた。平面図の作成は非常に難しく、何度もやり直しをした。まず初めの基準を決めるところから苦戦してしまい、何度も、点がずれてしまうことが起こってしまった。この作業は、正確かつ、素早い仕事が必要だと思われるので、これからは、練習や特訓が必要だと感じた。自分のシフトの日には杉山先生が、ドローンでの上空からの撮影を行っていた。現代の科学技術を、こういった調査に取り入れるにあたって、ドローンでの調査はとても活用出来るものであると思うし、今後の調査でももっと取り入れられると、より見えるものも増えていくのではないかなと思った。

今回の調査では、墳裾の位置や、上部から流れ落ちた葺石かと思われる石、また、東トレンチでは、石の道路のようなもの確認された。今回の発掘の位置からの出土の少なさからして、麓から見える位置には葺石が多く、見えない方は少なくしたという考察は自分も賛成だと感じた。また来年の調査でも更なる発見に期待したい。

今回の発掘調査でわかったことは、さまざまな協力や、チームワークがなければ、発掘はうまくいかないということ、また、発掘において、技術やその精密性

は絶対に必要だということがよくわかった。今回の調査で、考古学の面白さや奥深さ、また、いまだに発見されていないことがどんどんわかっていく楽しさを体で実感することができた。この経験を活かして今後も更なる、技術の向上、考古学における知識を蓄えていければ良いと思う。

夏期調査実習感想文

萩田 雅己 (L210792)

今回の調査実習はAグループとして参加し実習の最初の段階を行う予定でしたが、連日の悪天候により1日のみの参加となってしまいました。草刈りのみの活動となり古墳の形状しか捉える事が出来なかったのはとても残念でしたが、発掘調査の一環に携わるとても貴重な経験ができたと思います。後日共有された発掘調査の進捗を見ると自分が見知った場所で発見があると言葉に表せない高揚感がありました、一方であまり参加出来なかった事が悔やまれました。今後自主的に発掘調査等あれば自ら足を運び出来なかった事を行ってみたいと思います。

発掘の意義

堀川 楓華 (L210796)

今回の実習を経て、地域の人々に遺跡や遺構の発掘がどのように受け入れられているか知ることができた。作業の初日に地元の方に挨拶する機会があり、この調査に大きな期待を寄せてくださっていることが言葉や表情から分かった。話していく中で地元への強い関心と愛情を抱いていること、文化財が地域の誇りになっていることを感じた。地元にある古墳の詳細がわかることを楽しみにしている人の存在を



▲ 周山古墳群での地元説明会風景

知ること、発掘作業へのモチベーションが高まる。現地説明会などを開催することで、その地域の人々に新しく分かったことを伝えることが重要であると実際に声を聞いて理解した。少し話ただけではあるが、この縁は文化財が結んだ縁であると思うと感慨深い。文化財を地域へ還元することの大切さを、身をもって知ることができた。

草刈りやトレンチ設定、発掘を行ったが、どれも体力が必要な作業ばかりであった。遺物はどこからどのような状態で出てきたかが重要であるから、緊張感を持ちつつ広範囲を一定の深さ掘っていった。掘り始めの初日で出土第一号が出るとは思っていなかったため、鉄器が出土したとの知らせを聞いたときは驚き、草刈りの苦勞が少し報われたようでうれしかった。道具の使い方などなれないことばかりであったが、遺物が出るかもしれないという期待が大きかったように感じる。地域の方と話したり、発掘の仕方を断片的に知れたり、得るものが多い発掘実習になった。

悪天候の発掘実習

政川綾音 (L210797)

発掘現場に到着してまず驚いたのは、発掘場所の狭さであった。今までに、土地開発のために切り開かれた、だだっ広い平地での発掘作業しか見たことがなかったため、最低限の伐採だけで発掘作業をしているとは思っていなかったもので少々面食らってしまった。1日目と2日目は東トレンチの発掘作業の手伝いに回って土を一定の層まで露出させる作業や写真を撮るためにトレンチ周辺を清掃する作業を行った。その作業中にトレンチ内にある石をスポンジで磨いたのだが、現場の写真を撮るためにするといえ、とても地味な作業であると感じた。撮影された写真を見ていないので土をぬぐい取らなかった場合とでは何か変化があるのだろうか疑問に思った。しかし、その後に先輩たちが石の並びから用途を推測していたので石の並びをはっきりさせるために必要だったのかもしれないと考えを改めた。

2日目の昼から機械を使って杉の木とフェンスの測量を行った。他の人が測量をしているところは作業の合間に眺めていたが手作業で点を打ったり巻尺で距離を測ったりとかなり大変そうであったので、機械測量をした時にはあれだけ人間が苦勞していたことをボタン一つで正確な位置を記録できる機械の偉大さを痛感した。2日目で一番悩まされたのはや

はり急な降雨であった。機械を持ってテントまで雨宿りしに行くことも面倒であったし雨によって湿度が上がって地面がぬかるむことでかなり泥にまみれることになり踏んだり蹴ったりであった。

3日目は主に西トレンチの手伝いをしてから地域説明会の案内をしたので、前日と比べると身体的にはかなり楽であった。西トレンチでは表層から各地層までの深さを測ったが、地層の境界が全く分からなかったのととても難しかった。地元説明会が終わった後に西トレンチの掘り下げを手伝った。掘り下げる過程で石を複数個取り出したが、主に河原で採取できる石や縄文時代の石器が出てきたと言われた。これを受けて掘り出した石の種類から古墳がどのように作られていたか予想することが出来ることが分かったが、私には石の違いは判らなかったため、石の種類なども覚えてうえで判別しないといけないのかと思った。

今回の発掘調査実習は天候には恵まれはしなかったがとても良い経験になった。また、古墳のある場所によって発掘の進め方も違うと思うので機会があれば他の現場にも行ってみたいと思った。

古墳を通した地域の人との交流

松井 調 (L210799)

私は8月22日から24日の3日間にかけて、周山2号墳の発掘調査に参加した。古墳群は盗掘などもあってか、私の想像していた姿とは少し異なっていた。さらに、現場は地元の人でも誰でも入ることができそうなほど、開放的で、古墳がそれ自体ではなく、地域の一部として私の目に映った。私が現在住んでいる地域周辺には歴史的な建造物や、発掘の対象となるような場所は無いので、身近にこのような古墳群がある地域の人々は、どのようにそれを認識しているのか、彼らにとって古墳はどのような存在なのか非常に興味が湧いた。初日は平板測量を行った。終始わからないことばかりで戸惑いや失敗がままあったが、初めて体験する事がたくさんあり、勉強になることばかりだった。測量は1人ではできないことであるため、一緒に作業する人との協力が非常に大切だと感じた。

2日目は第2-1トレンチの掘り進めと、写真撮影のために、状態を整えるようなことをした。地道な作業の連続で、遺物などは出てこなかったが、掘り進めていくと、トレンチ内がどんどん綺麗になっていくので、やりがいを感じる事ができた。差し入

れで頂いたアイスがとても嬉しかった。

3 日目には、役所や近所のお宅へ説明会の案内のチラシを配りに回った。ポストにチラシを入れていき、人が玄関先にいるときには國下先生が直接手渡した。会う人会う人皆親切で、チラシも快く受け取っていただいた。説明会に参加すると言ってくれた方もいて、個人で関心の差はあるだろうが、周辺に住んでいる人々にとっても、周山古墳群は地域のシンボルや大切なものと捉えているのだと感じた。発掘調査は発掘に参加している者だけでなく、地域の方も共に取り組んでいるのだと思う。

3 日間発掘調査に参加してみて、発掘は決して一人ではできないことだと感じた。今回私がやらせて頂いたレベル測量を例にとっても、スタッフを立てる人、レンズから覗き込み定められた数値を調整する人、メジャーで距離を測る人、平板の用紙に書き込む人、4 人が揃って初めて測量ができ、等高線を作成する事ができる。人と人の協力があって初めて成しうることであると改めて感じた。又、違うクラスで話したことのない子たちと一緒に作業できたのもよかったと思う。

考古学を学ぶ上でこれから大切にしたいこと

松尾野々花 (L210800)

私は 8 月 23 日から 8 月 25 日に参加した 3 日間の発掘調査で、調査の一連の流れや基本的な技術を学んだ。それと同時に作業を通して、発掘調査をするうえで欠かせない姿勢や心構えも学ぶことができた。中でも大切だと感じた二点を振り返る。

まず、他者と協力し合うことで初めて発掘をすることができるという点である。これまで私は発掘調査の現場を実際に見る機会がなく、新聞の写真やテレビで放送される映像からしか発掘調査の現場を知ることができなかった。これらの写真や映像から、発掘調査は決められた区画内で黙々と個人作業をするものだという印象が強かった。しかし、実際に発掘調査に参加してみると、個人作業は一連の作業の中のたった一場面でしかないことを実感した。測量、掘削などすべての作業においてチームで協力しなければ調査を行うことはできない。測量にはレベルと平板を使ったアナログの測量方法とトータルステーションと電子平板を使ったデジタルの測量方法がある。どちらも一人で実測することは決してできず、円滑に測量するには互いに声掛けをすることが必要であった。また、掘削するときも同様に全員が現状を把握し、遺構がどのようなことを表しているのか、

この後どのように作業を進めていくのかを話し合ってから初めて掘り進めることができる。このように発掘調査は他者と協力し、対話をすることで成しえるものだと実感した。

次に、思いや情熱なしには調査をすることはできないという点である。これまでの講義で文化遺産は貴重で大切なものだと学習してきたことから、古墳を実際に発掘することにとっても緊張していた。初めて参加する実習でどのように作業をすればよいか分からず、先生方や先輩方から道具の名前から使い方まで丁寧に教えて頂いた。質問するとわかるまで何度も細かく教えてくださり、疑問に感じたことをその場で解決することができた。また、掘削の作業に加わったとき、先輩が率先して土の堅い場所を掘り進め、休憩時間さえも惜しんで作業を続けてくださった。先生方や先輩方の考古学に対する熱い思いや発掘に対する情熱を近くで感じ取り、発掘は技術に加えて情熱がなければやり遂げられないものだと気付かされた。

以上のように、発掘調査を通じて大切な心得を学ぶことができた。今回経験したことを胸にこれからも勉学に励みたい。

発掘調査実習参加記

南陸斗 (L210801)

発掘調査の現場へは初めて訪れた。どのような雰囲気で行われるのか、工事現場に見られる雰囲気や想像していたが少し違った。見たことの無い道具が多く、不慣れな作業となった。今回の発掘調査では 3 日参加する予定であったが 1 日目と 2 日目が中止となり 1 日だけの参加となってしまった。私が担当となった掘削場所は傾斜になっており、普段あまり運動をしていなかったのですごく大変な作業になった。初めは掘削場所の状況を説明されたがあまり理解することができなかったが自分自身掘削を進めるにつれ状況が把握できるようになり、掘り方など要領を掴めてきた気がした。土の変化や石の配置などで判断できる当時の状況を想定することはまだまだできなかったがそのための知識はゼロの状態からかなり身についたと思う。今回多く多用した道具が手スcoopで遺物を傷つけないための繊細な作業であると感じた。発掘調査に行くまでの私はどんどん掘り進めるような豪快なやり方を想像しており、機材があるものだと考えていた。そのため地道で丁寧な作業を行うことは考古学者への敬意を強めた。作業は昼前から夕方までであったが作業時間ではそれほ

ど多くの時間はやっていなかったのだが掘削作業は体力をかなり削られ発掘調査を甘く見ていたことを思い知った。私が発掘調査を行った日は初日ではなかったので大分作業が進んでいる状態であり、作業がしやすかったと思う。掘削作業ができたのも草刈りを綺麗にしてくれている人たちのおかげであり、多くの人の努力が見られ協力して作業が行われていることを感じた。今回の発掘調査では1日しか参加出来なかったが初めて学べたものは多く、続きの作業を継続してやり遂げたいと思えた。自分自身体力がなく疲れはしたが自分の知らない新たな分野を学べ、考古学の楽しさを知ることができ有意義な時間を過ごすことが出来た。

地道であると同時にやりがいのある経験

村崎結愛 (L210803)

私は体調不良で休んだ1日を除いた、8月23日と25日の2日間、周山古墳群2号墳発掘調査に参加した。授業の一環で夏休みに発掘調査を行うと聞いて、ただ楽しそうだと思っていた。しかし、実際に参加してみると、楽しいだけではなく根気強く丁寧な作業しなければいけないことがよく分かった。周山古墳群が位置する場所は標高が高く、夏にしては涼しかったが、斜面が急で動くのが非常に大変だった。はじめは説明を聞いた後に測量を中心とした活動を行った。まず、周山の地形や現在の古墳の状態を説明してもらい、土の色や構造を一通り学んだ。作業する場所は東トレンチと西トレンチに分かれており、土の構成もそれぞれ異なっているのに驚いた。測量ではレベルを用いて、RP50とRP51という2つの地点のうち、RP50を基点として測量した。



▲ 周山古墳群の調査・ミーティング風景

レベルは水平に気泡管を調整しなければならず、手前二カ所のダイヤルと奥のダイヤルを操作するのにかなり手こづった。また、障害物があるときスタッフの目盛りが読みづらくなるので動く必要があった。考古学実習が行われるレベルを用いた測量は初めてだったが、院生の方や先生がご指導してくださったおかげで、道具の原理を理解できた。

2回目の実習では西トレンチで、土嚢に掘った土を入れる作業を担当した。雨が断続的に降るので、途中遺構にブルーシートを敷くなど中断しながら活動を行った。約10cmまでは腐植土層の黒い土であり、その後は盛り土のような土が出てきた。そして、奥側(西側)はガサガサな土であり、手前側は密度の高い締まった土であった。山の中なので、掘り進めると土から根が飛び出てくるので、はさみやのこぎりで切断しなければならないのが大変だった。院生の方が、置き石が出てきたと考えられる箇所を掘り進めていたが、結局古墳の周囲を縁取るような石が他に出てこなかった。そのため、古墳の裾部を明らかにする作業は振り出しに戻り、非常に残念に思った。

測量、特に土を運ぶ作業はかなりの労力を欲するので、考古的知識はもちろんだが体力も必要不可欠になる。過去の授業で、考古学研究で発見された物的証拠は文献を裏付けるためにあると学んだ。また、文献のない時代は物的証拠だけがその時代を知る手がかりになる。遺物は発見できなかったが、発掘調査に少しでも携われて本当に良かった。今回の活動で得た貴重な経験を普段の授業や将来に活かしていきたい。

雨だったので

和田茉薫 (L210808)

私は最初の3日間実習に参加しました。…と言えたらよかったのですが生憎の雨で一日目、二日目はなくなってしまい最後の三日目だけ参加することができました。この一日で私ができたことはテントの組み立て、テントと支柱の番線での巻き付け、道具のテント内への持ち運び、古墳の上の草刈りでした。番線について巻き付けをするのも初めてでしたが、名前を聞くのも初めてだったので調査日誌に書く前に何度も名前を忘れて帰りのバス内で友人に聞いたり、ネットで調べたりと最終的には友人が鉄腕ダッシュと関連付けてネットで見つけてくれたので今こうして番線の話を書くことができました。また、草刈りをしたのも初めてのことでした。虫が苦手な

のに草刈りをする日程に参加してしまったので周りに迷惑をかけないか心配でしたが、そこまで虫もおらず安心して草刈りをすることができました。むしろ見たことのない色のカナブンを見かけて友人たちと少し盛り上がるという出来事があったくらいでした。他には、草刈りをするうえでとげがある植物の他に講義で話には聞いていた漆を初めて見る事ができました。最初はどれが漆か見分けがつかなかったけれど草を刈っていくにつれて見分けがつくようになり、人間の皮膚をかぶれさせるのは葉と樹液だということを学んだりすることができました。草を刈る作業はとても大変だったけれど、刈り始めたころに比べると最後の方は丘のようにになっている部分の多くの土肌が見えるようになっていて今日一日でここまでできたのかという達成感を得ることができました。

今回の実習では他の職業でも同じことが言えると思いますが、天気が大きく関連しているということ強く実感しました。一日の大きな作業として草刈りしか体験することができなかったのは残念でしたが、その分最初の3日間参加予定だったからからこそ考古学と天気の関連を強く感じる事ができて良かったとも思っています。

初めて発掘調査に行ってみて

永田裕希 (L208021)

私は8月22日から24日にかけて周山2号墳の発掘調査に赴いた。

初日は平板で2-1トレンチの測量を行った。まずは測量方法を教わる所から始まった。RP50のポイントを基準にアリダードとぶらりを使って水平に平板を置き、トレンチを縮尺50分の1の大きさで測量するのだが、図化においてRP50の地点を書く位置も重要で、また、アリダードに付けるものさしも50分の1用のものを使用する必要があり、これらを間違えると倍率が変わって上手く測量できなくなるということを知った。測量を進めていくうちにアリダードで覗いて微調整をする作業は集中力が必要であるように感じた。また、基本となるRP50のポイントと測りたいポイントの高さを合わせるためにメジャーを出来るだけ水平に保って引っ張ることも大切なポイントであるが、実際にやってみて木が邪魔だったり地面が凸凹としていて水平を保つことは難しかった。最近ではTS測量と呼ばれるものでこれらの作業がボタンで簡単に出来るらしいが、今後もし使うことがあっても仕組みを理解して活用出

来るので良い経験になった。

2日目と3日目は2-1トレンチの西側の土を掘った。2日目の時点では表面の土は柔らかく、途中5センチから10cm以内の大きさの礫が混ざった層もあり、下に行くに連れて湿っぽくなっていた。この時点ではまだ墳端部分がどのあたりにくるのかは判別できなかった。3日目に入り、さらに深く、かつ土の層が見えるように綺麗に根を切って断面を出すと、土の変化から1-3層くらいに分かれて盛られているのではないかと考えられた。1層目は明るい色の表土で、2層目は礫が混ざり、3層付近になると粘土質な硬いものになっていく様子が分かった。3層目の土は暗褐色をしており、その色が2層目に向かう途中で消える。そこが墳端なのではないかと考えられた。正直色が変わっていることは言われないと分からないくらい些細な変化のように思ったが、そんな些細なことでも年代を知る手掛かりとなることを知った。

2号墳は盗掘坑のようなものがあり、遺物が出土される見込みが少なく、結果的に私が行った期間では何も出土しなかったが、測量や古墳の年代を考えるための手掛かりとなるようひたすら土を掘る経験を通して、どんなことをしどんな意味があるのか全く見当もつかなかった発掘調査の現場を少し理解できた。

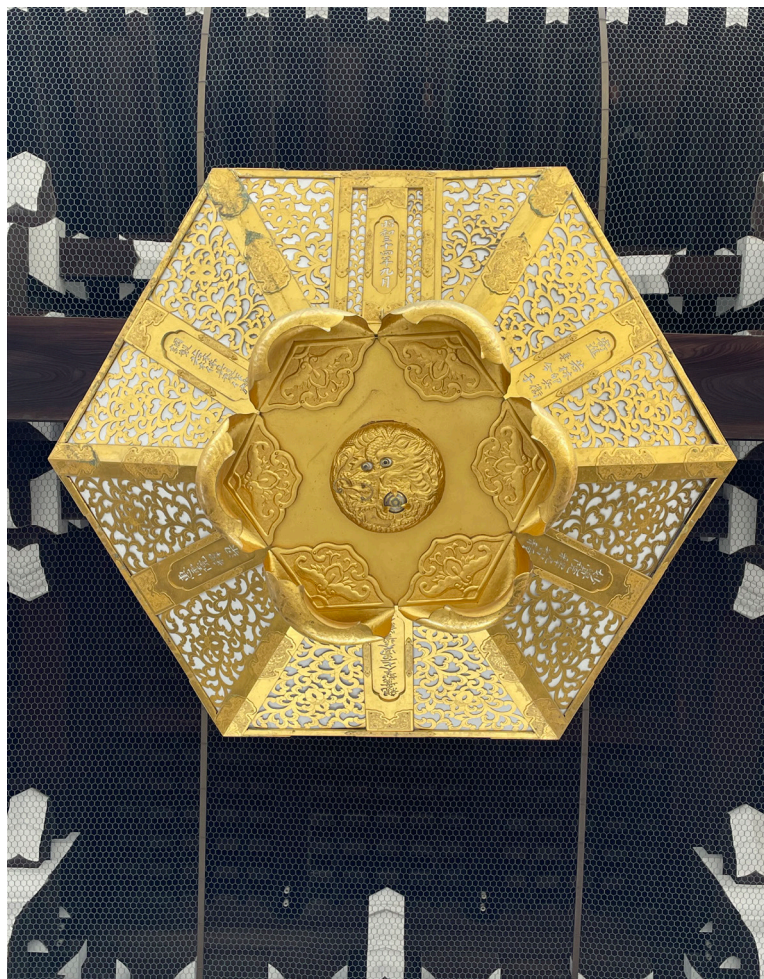


▲考古学実習のスタッフと考古学を学ぶ仲間

2022 年度龍谷大学文学部考古学実習報告書

編集・発行 龍谷大学文学部歴史学科
文化遺産学専攻
発行日 2023年3月9日

〒600-8268 京都市下京区七条通大宮東入大工町 125-1



西本願寺 吊灯籠 龍 (写真撮影実習 松尾野々花撮影)